

小児骨形成不全症患者の痛みによる障害と健康状態の自認に関する調査 - 横断

的研究

Exploring pain interference and self-perceived health status in children with osteogenesis imperfecta - a cross-sectional study

Provenzano AH, Åström E, Löwing K.

BMC Musculoskelet Disord. 2022 Sep 21;23(1):876.

doi: 10.1186/s12891-022-05825-5.

要約

背景：小児骨形成不全症患者には慢性的な痛みが生じる可能性があり、慢性的な痛みは患者の日常生活に影響を与えられる。しかし、どの程度の痛みが生じているか、また、その痛みがどのように日常生活や健康状態の自認に影響を与えるかはよく分かっていない。そのため、この研究の目的は、小児骨形成不全症患者における慢性的な痛みの有無、痛みが日常生活に与える影響、自分の健康状態をどのように感じているかを調べることである。

方法：6 歳から 18 歳の小児骨形成不全症患者がこの研究に参加した。参加者は痛みについての 5 つの質問（1. 痛みの有無、2. 痛みの頻度、3. 痛みによる学校欠席の頻度、4. 痛みの部位、5. 痛みの原因）と、疼痛評価スケール、疼痛障害指数、健康状態の自認に関する質問（PROMIS-25 を使用。7 日間の自身の健康状態について多角的に評価するツール）について回答した。

結果：骨形成不全症 I 型、III 型、IV 型の小児患者 28 名（中央値：11 歳）が参加した。28 名中 27 名に痛みが生じており、骨形成不全症の型や性別、年齢に関係なく、痛みによって日常生活が障害されていた。日常生活における疼痛評価スケールの中央値は 4（0~10 で評価。0 が痛みなし、10 が最大の痛み）であった。痛みの頻度の中央値は 2~3 回/週であり、痛みによる学校欠席頻度の中央値は 2~3 回/月であった。最も頻度の高い疼痛部位は背中と足であった。足の痛みは I 型の骨形成不全症でより高頻度にみられ（ $p=0.032$ ）、臀部の痛みは 13 歳以上の患児でより高頻度にみられた（ $p=0.011$ ）。患児たちに何が痛みの誘因となるかを聞くと、最も頻度の高い答えは「長距離の歩行」であった。可動性についての健康状態の自認は一般集団と比較して低く、III 型の骨形成不全症患児で最も低かった（ $p=0.016$ ）。痛みによる障害は患児の健康状態の自認と関連があった（ $r_s=0.84$, $p<0.001$ ）。

結論：ほぼ全ての患児が痛みを経験していた。痛みにより患児の日常生活が障害されており、様々な活動への参加に影響していた。また、健康状態の自認を下げることに関連していた。もし患児が痛みのために身体活動を避けるのであれば、活動性低下の悪循環に陥り、より骨密度が下がり、より骨折リスクが上がるだろう。今回の結果は適切に痛みを和らげるような

介入が重要であることを示している。

コメント

骨形成不全症患者の痛みに関する論文ですが、多くの患者が痛みを当たり前のように入れていることに気づかされる論文でした。骨形成不全症患者さんの中には生まれつき骨折を繰り返す患者さんも多く、全く痛みがない状態を経験しないまま成長する方もおられるはずです。骨形成不全症に対する治療は骨密度を改善させて骨折を減らすことを目的に行いますが、痛みをコントロールすることも重要であると感じました。